
私立武争学園 Dクラス戦闘報告書

蒼輔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「」のPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私立武争学園 Dケニア戦闘報告書

[π-Ζ]

N
7
4
1
7
K

【作者名】

蒼輔

[あらすじ]

学校内でクラス間の戦争勃発！？周りの人間は奇人変人がた――
――――――くさん！？俺の人生、立つた一度の学生生活が崩壊していくう――

一人の少年を中心に展開していく、何でもありのドタバタ系ラブコメディー！！

始まつてしまつた俺の不幸

春…新たな出会いの季節だと世間は言つ…最初の内は俺、『神沢歩』も新たな出会いに期待してたさ、長身だけが取り柄で面倒くさがりな俺でもな。ああ、してたとも。
…あいつ等と知り合つまではな。

私立武争学園…七年前に親父とお袋が創つた大学と高校が一緒のエスカレーター式の学園で、ある画期的な最新のシステムと技術を取り入れたことで話題になつてゐる。その画期的なシステムとは…クラス間の戦争。正直、そんなことをやれる訳がないと思うだろ?ところが、それが可能になつちまつたのさ…擬似戦闘システム、『バトルライザー』つてのが作られたせいでな。これは世界のお偉いさん方のいざこざを犠牲無く平和的に終わらせようと某大学の研究チームが国に以來されて開発を開始して、それから…まあ、簡単に言えば戦争を血を流さずに終わらせる為に作られた訳さ。それに目をつけたのが理事長と学園長、俺の両親つてわけさ。わざわざ勉強にリンクする様にしたバトルライザーを作り出しあがつた。才能の究極の無駄使いだ。…ちなみに、その学校用のバトルライザーの実験台は俺だつたりする。中三になつて、進路は問答無用で決定。そして…俺の一生忘れられない学園生活が幕を開けたのさ。

入学式…体育館でのくつだらない理事長と学園長（親）の話と生徒会長らしき生徒の挨拶が終わつて、クラス分けがあるからといふことで土間の前に新入生は集められた。ちなみに、この学校に学年はあるが、クラスは学年別ではなく同じクラスの学年で一つのクラスとなつてゐる。流石に大学と高校は別になつてゐるがな。しかも最初に分けられたクラスは大学卒業まで変えられる事は無い。…改めて思うが無茶苦茶だ。クラスはA～Hまである。親父曰く、Aが最

も良いクラスらしい。最悪はDらしい。しかもクラスは受験の時にやつた心理テスト的なもので決められているらしい。つまり、クラス分けに学力は関係ないらしい。なのに最高と最悪が決まるらしい。…これまた無茶苦茶だ。全く…この学園では常識は通用するんだろうか？まあいいや、いずれ慣れるよな。

「次、193番、神沢 歩！！！」

おっと、俺のクラスが言い渡される様だ。当然Aだろ。だって、親が理事長と学園長なんだぜ？ Aに決まってるさ。大切な大切な長男なんだぜ？

「Dクラス！－！」

俺はいらない息子の様だ。

クラス発表が終わつた。結局、Dクラスを言い渡されたのは新入生160人中…俺を含めて4人だ。俺と、黒の強い蒼の髪で不敵な笑みを浮かべている男子と、金髪のロングヘアで明らかに気の強そうな長髪の女子と、銀髪ショートヘアの見るからに無愛想な女子だ。新入生はとりあえず各クラスの校舎に行く事になつたので、当然、俺たち四人もDクラスの校舎に向かうわけだが…俺の気分はかなりブルーだつた。だって四人だぜ？これからやつていけるのかな、俺？これからの不安にかられつつ、俺（正式には俺達）はDクラスの校舎に向かうのだった…

「おい、そここの青年よ…」

黒の強い蒼の髪の男子が話しかけてきた。…終わらせようとしたのに何しやがる。

「…何？」

仕方が無いから会話をする。初対面から無視はできないしな。

「名は何と言つ？」

怪しいわりには普通な質問だな、おい。

「神沢 歩だ。お前は？」

「俺は『伊集院』だ」

「下は？」

「マイケルとでも言つておいたが」

前言撤回。まともな奴じゃないな、うん。

「して、そこの女子一人よ、名はなんといつ？」

名前を聞いたらそこまでなのか！？

「『ルミナ・綾瀬あやせ』よ

『岩瀬いわせ詩織しおり』

お、彼女達は普通っぽいな。

「あんたらの名前は？」

ルミナが聞き返してくる。まあ、相手が名乗ったんだからこっちも

名乗るのが普通だな。

「俺は神沢歩」

「俺は伊集院だ」

「…伊集院…下の名前は？」

名乗ると同時に岩瀬が伊集院に質問した。

「ジヨニーとでも呼ぶがいい

さつきと違つじやねえか！－

「…そつ…」

そつ言つと岩瀬は何事も無かつたかの様に黙つた。…本当に無愛想な様だ。

「む…着いた様…だ…ぞ？」

いつの間にか先頭を歩いていた伊集院が足を止めた。本人の言つた
とおり、校舎に着いたようだ？

「何じやこりや！？」

俺は驚きのあまり驚愕の声を出しそうだった。…なんせ俺の目の前にはどつかの童話のシ○ト○ラに出でてくるかのようなお城が建つていたんだからな。

VS 城の魔物

俺の目の前にはありえない光景が広がっている。お城だぜ、お城。日本のお城じゃなくてシ○テ○リに出てくるようなお城さ。いきなりのお城に俺以外のメンバーも驚いたようだ。良かつた、伊集院も岩瀬もちゃんとした人としての感性を持つてい…

「ハツーハツハツハツハ…！！俺の野望に、正にピッタリではないか！！」

「…面白そう…」

…ないようだ。

「…じつて、学園？…よね？」

良かつた、ルミナは普通だ。

「私の家にも無いのに…」

前言撤回。言動がおかしいね、うん。

「さて…My new friends 諸君、我らが新たな学び舎に行こうではないか」

伊集院の言つとおりだろう。むつじのお城のネタで突っ込むのも疲れだしな。

「そうね、行きましょうか

ルミナも俺達を促す。見れば岩瀬も小さくうなずいていた。無表情だが顔立ちがいいのでかなり可愛い。が、そう思つたのもつかの間、

「…どんなボスがいるんだろう…」

彼女の口からとんでもない言葉が飛び出した。ボスってなんだ！？ド○ク○か！？それともフ○か！？

「とにかく、入ろうぜ」

正直、突っ込みつかれた俺は早々に校舎という名のお城に逃げ込むことにした。これ以上は流石に付き合ひきれんぞ。

土間でスリッパに履き替え、何故か土間にあつた地図をとつて描い

てある通り教室に向かつたまでは良かつた。だが、俺の受難はまだ続いていた。

「ギャオオオオオン！…」

何でドラゴンがいるの…？つか、本当にボスがいたあ…！

「ほおう…面白いではないか…」

伊集院は不敵な笑みを浮かべてるしい…！

「…大きい…」

岩瀬、ここは冷静になつてゐる場合じやにだろ…

「これ…どうするの！…？」

良かった、ルミナは普通らしい。

「つか、本当にどうするんだよ！…？」

試しにみんなに聞いてみると、

「我が親友、神沢よ…あれを見ろ」

いつからお前と親友になつた！？とりあえず伊集院が指を指した場所に目をやつてみる。そこにあつたのは…ご丁寧に人数分置かれたバトルライザー。

「これでドラゴンと戦えつてかあ！…？」

驚愕の声を俺が上げる。実験台になつていた俺なら慣れているので、面倒だが大丈夫だ。だが、初心者にそう簡単に使いこなせるわけがない。しかし、困つて驚いてたのは俺だけの様だ。

「フム、これは肩に着けるのだな」

「…初陣…」

「やるつきやないわけね！…」

みんなやる気満々だ。…もうどうにでもなれ…！俺はバトルライザ

ーを肩に着ける。そして…

「ライザーシステム、起動！」
アウェイクン

バトルライザーを起動させた。

「「「起動！…」」

三人も続けて起動させる。そして魔法陣が自分の足元に浮かび上がる。

ここでバトルライザーについて説明しておこう。最初に説明した通り、バトルライザーは血を流さない国家間の争いの解決のために開発された機械だ。その最大の利点とは、最新技術をつき込まれて造られた擬似戦闘システムにある。一定範囲で感覚まで現実と一緒にの空想空間を作り出し、その中で自分の武器を持ち込んで兵隊さんが戦闘を行う。その空想空間内での戦闘では、痛みも感じるし服とかも破れたりと本当に現実と大差がない。しかし、一度空想空間を出るまたはバトルライザーを停止させると、なんと体力を消費しているだけ、つまり血が流れないという訳さ。勝ち負けはその時によつてルールが違うらしいが、戦争の事なんて俺は詳しく知らんさ。それを学校用に改良したのが俺の両親、理事長と学園長だ。色々な商品や特例を勝ちとらせるために生徒同士にクラス間で戦争させ、それによって学力の向上を狙つたのだ。だが、戦争させるだけじゃあ学力向上にはつながらねえ。だが、システムにテストで採つた点数を力としてリンクさせる、つまり、勉強しなきゃあ強くなれないようとしたのだ。しかも点数が高いと、超能力的な新しい能力に目覚めるのさ。…まあ、とりあえずはどんなバカでも戦えるように工夫はしてあるんだがな。その工夫つてのは初期装備システム（俺命名）といって、最初にやつた心理テストのデータをバトルライザーに読み込み、それによって自分にあつた武器とちょっととした特殊能力を得られるってシステムだ。…何？ネーミングセンスが皆無だと！？…気にするな！…まあ、こんだけ知つてるのは俺が実験台だったからなんだけどな。ちなみに、この学園では敵のバトルライザーを破壊した方が勝ちだ。

さて、ここからストーリーに戻るとしよう。魔法陣から球体が浮かび上がり、それが各々に応じた武器になつた。それぞれがその武器を手に取る。俺はシンプルな日本刀だ。伊集院は…手裏剣に忍刀にクナイ…忍者セットみたいだな。岩瀬は槍に片方に斧、片方に鎌が

ついている武器、ハルバードだ。ルミナは黒に金色の模様が描かれた装飾銃だ。…みんな見事に統一性が無えなあ、おい。まあ、いいや。とにかく、あの非現実的なドラゴンを倒すとしよう。三人とも初心者だ、俺がなんとかしよう、そう思った時だった。岩瀬が無言でドラゴンに突撃した。しかも信じられない事にドラゴンの攻撃を全て回避してやがる。そしてそのまま…無言でハルバードの斧の部分を容赦無くドラゴンの尻尾に振り下ろした。

「ギャオオオオアアアア…」

一刀両断、ドラゴンの尻尾は付け根の部分からバツサリと斬り落とされた。ドラゴンは苦痛の声を漏らしている。そこに間髪入れずにルミナが動いた。装飾銃を撃ちまくる。鈍い音をたてて弾丸は全て鱗に弾かれている。どうやら岩瀬は銃弾を通さないような強度を苦もなく叩き斬ったわけだ…化け物かよ。その岩瀬がまた動いた。今度は一気にドラゴンの背中まで駆け上がり、肩翼を付け根から斬り落とす。…痛そうだな…あまりの一方的な展開に、俺はドラゴンに同情してしまった。

「ハツーハツハツハツ…寝るにはまだ早いぞ、爬虫類よ…！」

いつの間にやら行動していたのか、伊集院が忍刀を両手に持つてドラゴンに一気に肉迫し、ルミナが銃弾を当てた場所を恐ろしい速さで正確に攻撃していく。銃弾によつてダメージを受けていた鱗は簡単に碎け、ドラゴンの皮膚に忍刀が深々と傷をつける。そして…あつけなくドラゴンが倒れた。俺の出番はゼロだ。

「やつた、勝つた！…」

「フッ…当然だな」

「…クリア…」

三人が口々に喜びの声を上げる。俺の肩身がやけに狭い。まあいいか、俺も混ざろう、そう思つた時だった。不幸つて連鎖するもんだな。あんの爬虫類、まだ息がありやがつた。ドラゴンが立ち上がつたのに気づいたのは…俺一人。

「危ねえ…！…三人とも、伏せろお…！」

Г Г Г ... !

俺が叫んだと共にドラゴンの右フックが三人を襲つた。全員直撃こそしなかつたが、受けたダメージは小さくなかった。次がきたらヤバい。ドラゴンは容赦無く三人に攻撃しようとしている。考える時間は…無い。俺は一気にドラゴンに肉迫した。まだ刀の射程内じゃない。だが、ドラゴンの両腕に狙いを定めた。そして…

「数学点数解放！」

「承認シマス、理数系レベル2能力解放」アビリティ

新入生では絶対に知り得ない、バトルライザーのシステムを発動さ

七
九

卷之三

1

叫びながら力一杯刀を振り切る。剣光一閃、ドラゴンの両腕を斬り落とし、更には胴体までも真つ二つにした。刀はの刃はドラゴンにとどいてはいない。しかし、刀から放たれた光が、深々とドラゴンを斬り裂いたのだ。…力を込めすぎたかな…なんて思つていると、ドラゴンの死体が消えた。どうやらこれはバトルライザーのシステムを応用して作りだした物だったようだ。…誰が作つたのかは知らないけどな。その後、俺は気を失つている三人の目が覚めるまで、その場に留まつていたのだった。

朝けまな：学生、社会人、どんな人にしたつて憂鬱な時間帯であろう。眠ねむ：気眼を擦り、何とか布団という名の人間ホイホイから抜け出し、顔を洗い、着替えて朝食をのんびりと食べながら、さて、今日はどうしようか？、なんて事を考える。俺だつてそうだつたさ。だが…現実は許してくれなかつたんだ…俺が平和に生きる事をな。何故かつて？『対Bクラス作戦会議』…登校し、教室に着いたらきなりこれだよ！我らがDクラスの教室にはでかでかとその文字が書き込まれていたのさ。…どうしてこうなつたのか、おつて説明していこう。

非現実の爬虫類、ドラゴンを倒した後、俺は気を失つた三人が起きたまでその場で待つっていた。数分したら全員無事に起きた。…バルライザーは現実には影響しないんじやなかつたのかつて？確かに怪我はしないが、あくまでも感覚はそのまんまなんだ。殴られりやあ痛いし、その空間の中では怪我をしてるんだ、動けなくもなるし氣絶もする。まあ、簡単に言えば外傷は無いだけつてわけだよ。そんな訳で、三人が目を覚ましたからそのまんま一緒に教室に向かつたんだ。その後だつた…ある出来事が起こつたのは…

十分後、俺達は地図を見ながらなんとか教室の前まで到着した。…何で土間から教室がこんなに離れてるんだよ！？外見は外国風のお城であるこの校舎も、教室は至つて普通だつた。俺は内心ホツとしながらドアを開けたその時だ、クラッカーの快音が鳴り響いた。そして…

「「「新入生のみなさん、ようこそ、Dクラスへ！…」」三人の女の先輩が俺達を迎えてくれた。どうやらクラッカーはこの為だけにわざわざ用意してくれたようだ。…そんな事よりも、三人

とも美少女としか言いようが無いほどレベルが高かつた。一人は綺麗な黒髪のロングヘアで、それをポニー・テールに纏めている、活発的な印象を受ける。一人は茶色のロングともしショートともいえない長さの髪だ。しかし、両眼の色が右が赤で左が青という、オッドアイが特徴的だ。一人はライトグリーンの様な鮮やかな黄緑色のショートヘアの髪に、フレームが丸い眼鏡をかけ、知的な印象を受ける美少女だ。…レベル高いな、Dクラスつて。

「みんなー、新入生がどうちゃくしたよー」

オッドアイの先輩が教室の中に向かつて知らせた。

「さあ、入つて入つて」

そんまま流れるように俺達四人を教室に招き入れる。どうやらオッドアイの先輩は仕切るのが上手いようだ。何せ教室に入つて、気づいたら席まで勧められてるんだからな。…いや、俺がボッタとしていただけだな。俺は何気なく教室内を見渡してみたが、さっきの女子の先輩と俺達新入生を除くと…男子の先輩が四人…少なっつ！！！後は教壇の近くにいる教師らしき男の人が一人だけ。…本当に学校かよ、ここは。

「よし、新入生も來たし、まずは自己紹介から始めようか」

教師らしき人がそう告げつつ教壇の前から退いた。それに続く様に、高校生としては高めの身長で、黒い肩までとどく長さの髪の先端の一部に真紅のメッシュが入つた男の先輩が、面倒くさそうに立ち上がり、教壇の前に立つた。どうやら先陣を切るつもりのようだ。…まともな人であつてくれ。

「三年、Dクラス生徒総司令長の『暁香^{せいとうそうしれいちょう}』^{ぎょうか} 昂輝^{こうき}』だ。ま、気楽にやつていこうや」

簡単に自己紹介を終え、暁香先輩は教壇の前から退いた。…俺と同じ面倒くさがりの匂いがするな、あの指令長。だけど、動きに無駄が感じられなかつた。実はすごい人なのかもしない、そう思えた。この際、学園なのに総司令長つてどこには突つ込まないでおこう。次に教壇の前に立つたのは、黒髪ロングのポニー・テールの女子の先

輩だ。改めて先輩を見てみると、スラッシュしたしなやかな肢体で、見るからに爽やかであった。

「同じく、三年の『Dクラス生徒副総司令長』の『久城 優姫』です。昂ちゃんと同じく、私はみんなの指揮を執る立場ではありますが、気を使わずに仲良く行きましょう」

「昂『ちゃん』、だと…？おのれえ、久城先輩はもう既に予約済みのか…。とか何とか考へてる内に、次の先輩が教壇に立つた。男の先輩で、緑色のターバンを頭に巻き、弦がギザギザになつてているサングラスをかけていた。…どこぞかのロッカーかよ。

「同じく、三年の『澤木 潤』だ。よろしくな」

…自己紹介は意外に普通だつた。次も男の先輩で、少し小柄で、黒いショートヘア…残念がらこれと言つた特徴が見当たらぬ…。

「同じく、三年の『獅子堂 僖矢』といいます。先輩、後輩関係無く、フレンドリーにやっていきましょう」

…獅子堂先輩、本当に特徴が無えな、おい。次は…四角いフレームの眼鏡をかけたグレーのショートヘアで、異様に長身な男の先輩が立ち上がつた。…2mくらいはあるんじゃないのかね、あの先輩。

「同じく、三年の『御久間 聖子』です。とりあえず、よろしく」

眠たそうにしながらの御久間先輩の自己紹介：あの人も俺と同じ匂いがするなあ…。次はいよいよ女子の先輩方の番の様だ。久城先輩は生徒副司令長だったので先にしたのだろう。まずはオッドアイの先輩が教壇の前に立つた。

「同じく、三年の『榎宮 朱里』でーす。明るく、元気よくやっていきましょー！！！」

…テンション高えな…俺はついていけないかもしねないあと思つた。

次は、ライトグリーンのショートヘアの眼鏡をかけた先輩だ。

「一年の『椎堂 美夜子』です。本当なら僕以外にも後一人一年生がいるんですが、都合で席を外しています。だから二年生は一人だけじゃないんで、安心してね」

…うん、この説明が無かつたら俺も一人だけかと思つたよ。次はど

うやら俺達の番みたいだな。もうすでにルミナと岩瀬は自己紹介を終えた様だ。次は伊集院の番みたいだ。

「伊集院という。先輩方これからよろしく頼むぞ」

何様だあ！？

「下の名前は何て言つの？」

榎宮先輩がそう尋ねる。：俺達もした質問だ。流石にここなら真面目に答え…

「ワトソンとでも呼ぶがいい」

：無い様だ。新入生以外は大爆笑だ。次は俺だ。無難にすますとしよう。

「えーっと、俺は神沢 歩です。みなさん、よろしくお願ひします「OK、我ながら上出来だ。やっぱ普通こそがベストだよな、そう思いながら教壇の前から退き、席に着いた。最後は先生の番の様だ。長身でがっしりとしつかりとした体に、さっぱりとまとめた刈上げの髪、正に体育会系といった感じだ。

「俺がDクラス担任の『卯佐美 猛士』だ。いいか、俺は個人の意思を第一に優先する。俺はその意思には反対もしないし賛成もしない。去年同様、今年もお前達のやりたいようにやれ、以上だ」

やりたいようにられつて：Dクラスが最低と言われる原因が多少分かった気がした。卯佐美先生は教壇から退き、教壇の前に暁香先輩が立つた。どうやら後は暁香先輩が仕切るようだ。

「さて、ここからの予定を…」

そう言つた瞬間だった。爆音と共に教室のドアが…吹き飛んだあ！？立ち上がる煙の中から、バトルライザーで武装した集団が教室に入つて來た。左肩に着いているバトルライザーの真ん中の水晶にはBの字が刻まれている。：つーことは来たのはBクラスか。聞いた事がある。BクラスとDクラスは犬猿の仲だと。

「何の用だ… Bクラス生徒総司令長、『倉野 興一』！」

暁香先輩がBクラスの一人を思いつき睨んだ。他の先輩は既に身構えており、戦闘態勢だ。すると、Bクラスの一人が進み出てきた。

そして…

「よう、暁香… Dクラスの分際で新入生なんか手に入れてんじゃねえよ…」

「どうやら無茶苦茶な理由で攻めてきた様だ。倉野は手に持つていた両手剣を暁香先輩に突き付ける。そして…」

「気にいらねえなあ… BクラスはDクラスに戦争を申し込むいきなり無茶苦茶な理由で宣戦布告してきた。

「そんな無茶苦茶な宣戦布告、受けられるわけが…」

俺がそう言おうとした時だった。

「…良いだろ？…受けてやる、その宣戦布告…。」

暁香先輩がとんでもないことを言ってしまった。

「ただし…勝った方が何でも一つ相手の言つ事を聞く…それでどうだ？」

言つ事を聞く！？何て事を…！俺達も被害を受けるってことかよ。

「いいぜえ…それでお。ギッタギタにしてやらりあ…！」

そう言つと、Bクラスは撤退して言つた。…マジかよ…？入学からいきなり戦争すんのか！？

「みんな…歓迎会は延期だ… Bクラスとの戦争会議をするぞ…！」 待てよ、いくら総司令長である暁香先輩がの決定とはいえ、俺は反対だ。面倒くさいからな。みんなは…

「フツ…面白いではないか」

「…勝つ…」

「…いきなりの戦争つて、おもしろそうね」

「昂ちやんの決めた事ならどこまでも…」

「返り討ちにしちゃおー…」

「僕は一向に構わないよ」

「しゃーない、やつてやれりつ」

「やるのはいいけど、やりすぎぎんなよ」

「了解だ」

… やる気満々なんだな…。

いつって、俺の朝は憂鬱から始まるのだつた……

模擬戦 1（前書き）

遅くなつてすいません。まだちょっとバタバタしますが、ちよつとずつでも書いていくつもりです。

Bクラスとの戦争が決まった次の日、俺達Dクラスは暁香先輩を中心としてBクラスとの戦争の作戦会議をしていた。そして、暁香先輩の結論は：

「まず、一年がどんな力を持っているか、模擬戦闘して調べるぞ。そうしないと作戦が決まらない」

「とのことだつた。面倒だがもつともだろうな。俺を除いて、一年はまだバトルライザーの機能を完璧に把握できていない。更に、当然ながら一年は先輩の能力も知らない。ただでさえ人数の少ないDクラスだ、一年生が即戦力にならなければ戦争など出来ないだろう。

「今日一日、全ての授業を免除してもらおう。俺は今からその旨を学園長と他の先生達に伝えてくるから、俺が戻り次第模擬戦闘を始めるぞ」

そう言つて暁香先輩は教室から出て行つた。入れ替わる様に久城先輩が教壇の前に立つた。

「さて、昂ちゃんが居ない間に一年生のクラス登録を済ませます。登録しておかないと、戦闘等のバトルライザーを使った行動が一切できません」

また面倒な事を…つて、登録しないとバトルライザーが使えない？じやあ何で昨日のドラゴンを倒す時は使えたんだ？

「ああ、ちなみに、昨日四人が一年生の腕試し用のドラゴンと戦つた時に使つたバトルライザーは、御久間くんがリミッターを一部外した特別製のやつなの。だから使えたつてわけ」

俺達の疑問に気づいたかのように、優しく微笑みながら久城先輩が補足してくれた。成程な…つてえ、あんたらがあのドラゴンを差し向けた張本人かよ！！現実に害は無いけど、痛みだけは本物なんだぞ！！

「それじゃあ今から一年生にバトルライザーを配ります。朱里ちゃん

ん、お願ひね

「ハイハイ！」

声をかけられた榎宮先輩は、席から立ち上ると、ロッカーの上に置いてあつた段ボール箱を持ってきた。その中から更に一回り小さい、煉瓦くらいの大きさの箱を取り出した。…あれ？バトルライザーフてあんなに小さかつたっけか？たしかコンピューターのキーボードくらいの大きさはあつたはずだ。あんな小さな箱に納まるような大きさじやない。本当にバトルライザーなのか？そう思いながら配られた箱を受け取る。

「それじゃあ、箱から出して装着してみて」

全員が受け取つたのを確認すると、久城先輩は一年生にそろそろめた。俺は箱を開けてみた。そこに入っていた物は…甲の部分に透明な水晶が付いた機械が付いている指先の部分が無い手袋。しかも片手の分だけ。俺もこんな形は見た事が無いが、手袋なんだから手に装着するんだろう。機会が手の甲の部分にくる様に装着した。伊集院達も不思議そうな顔をしながら同じようにしている。

「君達がドラゴンと戦う時に使つたバトルライザーは試作品だから、無駄に大きいし、肩の様な戦う時に^{まと}的になりやすい部分にしか装着出来なかつたの。これはDクラスが独自に開発し、小型化したものよ。ちなみに、クラスによつてバトルライザーは違うから、他のクラスと戦う際は注意してね。装着しだい、各自バトルライザーを起動してね」

クラスで独自に開発したなら俺も知らないわけだ。なら、心配いらないな…

「ライザーシステム、起動！」^{アウェイクン}

俺はバトルライザーを起動させる。伊集院、岩瀬、ルミナも同じ様に起動させている。四人の足下に魔方陣が浮かび上がる。そこから光の球が現れて…こない。あれ、いつも武器に変化する光の球が現れるのに…何で現れないんだ？そう思つていると…

「神沢、涉ヲDクラス二登録、システム起動ヲ承認シマス」

バトルライザーの水晶が発光し、機械の声が聞こえてきた。すると、透明だつた水晶が金色に染まり、眩いばかりの金色の閃光が放たれた。そして…

「何じゃこりゃあ！？」

俺の姿はどこぞかのゲームの勇者の様な服装になつていた。…俺の学ランは何処にいつたんだっーー？両肩が丸出しの蒼を基調とした英國風の貴族服…肘から先は文字の刻まれた銀色のガントレットで覆われ、白を基調としたズボンには何かマントの様な布が着いている。刀は普通…じやなかつた。刀身には何か分からぬ文字が刻まれ、柄が少し豪華になつてゐる。バトルライザーの水晶には…Dの文字が刻まれてゐる。一年生はみんなセーラー服や学ランではなくなつてゐる。伊集院はまるつきり忍者の姿だ。岩瀬はへそまで無い黒のタンクトップにボロボロなジーパン、いわゆるダメージジーンズだ。…露出多いな、おい。ルミナは縁を基調としたワンピースだが、ドレスっぽい要素も混ざつた様な感じだ。ハンドガンは金で装飾を施された装飾銃になつてゐる。みんなドラゴンと戦つた時とは全く違う。俺も実験の時にこんな姿になつた事は無い。…どうなつてんだ？

「はい、これでみんな正式にDクラスに登録されました。ちなみに、この変身機能はこっちの方が面白そうだつてことで、学園長と理事長が去年から取り付けた新しい機能です」

久城先輩はエスパーか！俺の疑問を聞く前にことじとく答えてる。…おそろしや、久城 優姫…とかなんとかくだらない事を考えていると…

「サンキュー、優姫。ほつ…中々に様になつてんじゃねえか、一年生。とりあえず一回システムを解いとけ。初めの内は長い時間使うと体力がもたないからな」

暁香先輩が帰つて來た。手には許可書と書かれている紙を持つている。…本当に授業無くしてきただ…。とりあえず言われた様にシステムを止めた。久城先輩が席に着き、暁香先輩が教壇の前に立つ。

「おっし、これから模擬戦闘を始める。まずは…岩瀬、お前からだ」

「…了解…」

岩瀬がトップバッターの様だ。ドラゴンを倒した時、多分彼女が一番ドラゴンにダメージを与えていただろう。…何が言いたいかって？決まってる、岩瀬は…多分無茶苦茶強い。

「相手は…そうだな、朱里、やつてくれるか？」

「ラジャー…！」

指名を受けた榎宮先輩は元気よく立ち上がると、教室の後ろ、丁度大きく空いているスペースに向かつた。岩瀬も無言でそれに続く。

そして、二人とも構えた。

「いっくよー！！起動！」^{アウェイクン}

榎宮先輩のバトルライザーが起動した。藍色の光が先輩を包んだ。その光が解けると…凛々しい英國の女騎士の姿となつた先輩の姿があつた。手には…身の丈ほどもある両手剣。…かなり強そうだ。

「…起動…」

岩瀬のバトルライザーも起動した。白い光に包まれ、岩瀬愛用のハルバードが出現し、服装も変わった。

「準備はいいな、二人とも？」

暁香先輩が二人に尋ねた。

「オッケーだよ」

「…問題無い…」

準備万端の様だ。

「それじゃあ…バトル、スタートだ…！」

暁香先輩の合図と同時に、二人共同時に突撃し、模擬戦が始まった。

岩瀬のハルバードと榎宮先輩の両手剣がぶつかりあつた。単純な力は…互角。そのまま一回、二回と刃を交える。四回目を交えたところで鎧迫り合いの様な状態になつた。先に動いたのは…先輩だつた。左手を剣から離し、そのままストレート。岩瀬は後ろに飛び、紙一重で先輩の拳を回避した。

「やるねえ、しーちゃん。一年生でここまでやれるなんてびっくりだよ」「

おいおい、いきなり三年生から絶賛されてるよ。しかも『しーちゃん』なんて呼ばれてる。

「けどね…」

いきなり先輩の雰囲気が変わつた。…まさか…

「力押しだけじゃあこの学園じゃ生き残れないよ…！」

先輩の剣の刃が光つた。そのまま容赦なく剣を振り下ろした。光の刃が岩瀬に襲いかかる。入学したての一年生相手に能力を使いやがつた！？ヤバい、岩瀬に防ぐ術は無い…！つか、防げねえ…！他の先輩も止めようとする気配はない。

「くそつたれがあ…！」

俺は叫びながら駆けだした。

「ライザーシステム起動！」
（アウェイクン）

自分のバトルライザーを起動させた。金色の光に包まれ、その光から飛び出す感じで二人の間に割つて入る。目の前には光の刃。その刃に対して左手を銃の形をとつてかざす。

「能力解放、いつけえ！！」

その瞬間、俺の指先から稻妻が迸つた。稻妻は真つ直ぐに光の刃にぶつかり、光の刃と共に四散した。

「いきなり能力ぶつ放すなんて酷いんじゃないんスか、榎宮先輩！」

いきなり割つて入つて猛抗議だ。

「だつて。どうする、昂輝？」

榎宮先輩は何事も無かつたかのように暁香先輩に判断をあおいだ。クラスの責任者である暁香先輩は必ず正しい判断を下して…

「構わん、一対一で続ける」

「あんたら鬼か！？こうなりやあ…」

「岩瀬、下がつてろ」

全力で戦^やるしかない。俺は岩瀬を下がらせる。岩瀬は静かに頷くと、数歩後ろに下がつた。

「りょくかい。そんじゃ、手加減抜きでいくよーーー！」

榎宮先輩も剣を構えた。

「本氣でいくよーーーどうなつても知らないからね？」

につじりと悪魔の笑みを浮かべながら恐ろしい事を言ひ。

「闘氣劍^{オーラブレード}、解放！！」

さつきの一発とは違う、凄まじい光を放つ先輩の剣。本気の様だ。

「上等…リミット解除…先輩こそ、どうなつても知りませんよ？」

俺は刀に手をかけた。いわゆる居合い斬りの構えだ。

「リミット解除！！」

俺の周りに凄まじい量の蒼い雷が渦を巻く。…俺と先輩の目があつた。そのまま両者とも突撃した。雷を纏つた刀と、光を纏つた剣がぶつかり合つた。その瞬間、凄まじい閃光と爆発が巻き起こつた。外からは煙で中の様子が全く分からぬだろう。…煙が晴れた時、その場に立っていたのは…榎原先輩ではない、そう、俺だ。

「成程な…」

倒れている榎宮先輩を見ながら暁香先輩が呟いた。

「神沢 歩…」

暁香先輩は立ち上がりながら俺の名前を呼ぶ。

「お前の次の相手は…俺だ」

そのまま地獄の一連戦が宣告された。しかも…相手は暁香先輩…いきなりバ○バ○ス並の人が出てきた。

模擬戦 2（後書き）

短くてすいません。次は少し長めにする予定です。

雷VS炎

俺は刀を構えて無言で暁香先輩を睨み付ける。

「バトルスタンバイ、アウェイクン起動！」

暁香先輩がバトルライザーを起動させた。先輩を紅い閃光が包み、弾けた。その場に、紅い改造された燕尾服に身を包んだ先輩が立っていた。見るからに強そうだ。そんな風に思つていると、いきなり先輩が…消えた。気付いたら目の前にいる。…ヤバい、避けられない！咄嗟に左の掌を前に突きだし、稻妻を放つ。瞬間、また先輩の姿が消えた。一瞬、俺の耳に風を切る音が聞こえた。…後ろか！？

「ほう…このスピードによく反応したな」

…後ろを向いた瞬間、俺の顔面が先輩の左手に鷲掴みにされた。それを認識した瞬間…凄まじい熱さと激痛と共に浮遊感。受け身もとれずに床に落下した。

「ぐつ…はあ…！」

何とか立ち上がりながら状況確認。先輩は俺の腹を右手で殴った、それは状況から推理できた。が、この熱さは何だ？明らかに殴っただけじゃあ無い。つか、殴っただけじゃあ服は焦げない。俺の腹部の服はしっかりと焦げていた。…その理由は…すぐにわかった。先輩の回りに、俺の雷の様に炎が渦巻きだした。

「成程な…俺の炎バージョンって事か…」

炎を纏つた拳で殴られた訳か。そう思った瞬間、また先輩が消えやがつた。

「同じ手を何度も食うかよ…！」

俺は稻妻を自分の回りにドーム状に発生させた。

「…ちい！」

先輩は舌打ちしながら接近を止めた。そのまま後ろに跳ぶ、その瞬間…

「隙だらけだぞ、暁香 昴輝！！」

いつの間にバトルライザーを起動していたのか、伊集院が一気に接近し、奇襲をかけた。

「ちーーー！」

舌打ちして更に後ろに下がる。しかし、伊集院の忍刀が先輩を捉えた、そう思つた時だった。伊集院の前にミサイルが降ってきた。えつ、ミサイル！？ 待てや、何でもありか！？

「おおとおーーー！」

ワザとオーバーにリアクションしながらミサイルを全弾避ける伊集院。あいつ、絶対に本気でやつてないだろ…。言葉に真剣さが感じられない。

「ナイス援護、潤」

「なーーに、気にすんな」

なはは、と笑い声が聞こえた。成程、今の邪魔は澤木先輩か。声のした方を見てみると…澤木先輩は…宙に…浮いてるう！？ 反則だろ！…ターバンが無くなつており、そのかわりに縁のバンダナになつている。服装は至つてシンプル、白の半袖のTシャツに黒いジーパン。だが…背中にはマ○ジ○ン○ガ○ンのジヒツ○ス○ラ○ダ―の黒いバージョンが…生えている。右腕にはミサイルの発射口が付いている…サイボーグなのか？

「さて、ここまでやつたらもうケリつけるしかないぜ、昂輝」

こんな状況なのにすんばらしく気楽な声が聞こえる。

「すまん、ここまでやる気は無かつたんだがなあ…予定が狂つた」

予定？ 何の事だ？

「さて、そこまで暴れたいなら相手してやるよ、伊集院」

「ふつ…後悔しても知らんぞ？」

「はつはつは、そりや面白そうだ。…なら、やつてみーーー！」

澤木先輩が一気に急降下して伊集院に襲いかかる。伊集院はそれを軽く流した。…どうやら伊集院はほかつとっても大丈夫そうだ。それよりも…俺は暁香先輩と再び睨み合つた。…今度は…俺の番だ…！

「数学ポイント、解放！！」

「承認シマス。スキル、『雷鳴波』ヲ解放」

俺の刀が再び雷を纏う。まともにやりあつたつて勝てない事はさつき分かつた。なら…一撃勝負でケリをつける…！」

「理科ポイント、解放…！」

「承認シマス。スキル、『炎竜波』ヲ解放」

暁香先輩はこの勝負にのつてくれた様だ。炎の竜が先輩の前に現れた。…勝てるかな？いかんいかん、弱気になつてどうする。俺はここで勝つて、一発ガツンと先輩たちに言つんだ。その為にも…勝つ…！」

「天駆ける紅き聖獣よ、我に仇なす者を焼き尽くせ…！』『炎竜波』…！」

炎の竜が俺に向かつて放たれた。

「天空貫く大いなる剣よ、波動と成りて敵を撃て…！』『雷鳴波』…！」

！」

刀から雷のソニックブームが先輩に向かつて飛んだ。炎の竜と雷がぶつかった。もちろん…大爆発した。そして…

「バトルライザー破損、システム停止シマス」

暁香先輩と俺、二人揃つてバトルライザーが壊れた。そう、相討ちになつたんだ。まあ、頑張つた方か、俺はそう思う事にした。

雷∨S炎（後書き）

誤字脱字、これは絶対におかしいだろ、てのがあつたら教えてください。直ぐに修正します。

模擬戦終了（前書き）

更新遅れてしません。ちょっと色々バタバタしてて…これからはちゃんと更新していくと思います。

模擬戦終了

自分の戦闘が終わった俺は、伊集院と澤木先輩の戦いに目をやった。「そらそらそらあー！！！避けたばかりじゃ勝負にならんぞおー！！」これでもかとミサイルやらガトリングやらをぶつ放す澤木先輩。それを確実に回避していく伊集院。中には追尾式のミサイルだつてあるんだぞ、どうやって回避してんだ、伊集院。そう思つてたらミサイルの煙で伊集院の姿が見えなくなつた。

「しまつた、撃ち過ぎたか…？」

澤木先輩が伊集院の姿を見失っている。成程、これが狙いだつた訳だ。賢いなー、伊集院。そして…

「…もらつたぞー！！」

声と共に伊集院が煙の中から飛び出した。

「後ろか！？」

澤木先輩も声のした方向に振り向く。だが…少し遅い。伊集院の忍刀が襲いかかる…！…だが…

「…お痛はメツ、ですよ？」

久城先輩が忍刀を薙刀で止めている。巫女服に身を包み、朱色の薙刀で武装している久城先輩…またかよー！…だが…こっちだってまだ戦力はある。

「…甘い…！」

岩瀬が久城先輩に斬りかかる。伊集院を弾き飛ばし、岩瀬の攻撃を防ぐ。だが、更に…

「援護するわ、詩織ー！」

ルミナがハンドガンで援護する。

「ぬおー！」

澤木先輩がルミナの放つた弾丸を全てミサイルで撃ち落とす。

「安心するのはまだ早いぞー！！」

体制を立て直した伊集院がまた澤木先輩に斬りかかった。

「う…おつ…！」

伊集院の忍刀を澤木先輩は素手で受け止めた。どうやら澤木先輩はシステムを起動するとサイボーグになるようだ。でなきやあ腕は真っ二つのはずだ。

「潤君…！」

久城先輩が澤木先輩の援護に入ろうとする。だが、岩瀬の攻撃とルミナの援護射撃によつて思う様に動けない。

「コンビネーション良すぎだろうがよ…！」

澤木先輩が思いつきりぼやいた。先輩としての意地か、伊集院を何とか弾き飛ばし、左腕のガトリングで追い打ちをかける。伊集院はその弾丸の雨を一本の忍刀で防ぎながら突っ込む。正に一進一退の攻防戦が行われていた。岩瀬とルミナは協力しながら久城先輩を止めしている。これならいける、そう思った時だった。

「サークル・ギア発動…！」

その声と共に、一瞬で戦闘のケリがついた。一年生のバトルライザーが全て壊されていた。やつたのは獅子堂先輩だ。服装が改造学ランに変わっている。つまり、能力を使つたって事だ。

「模擬戦は終了だ、一年生」

暁香先輩がそう言った。模擬戦だと…今の無茶苦茶なのが？俺は抗議しようとした瞬間…

「すまなかつた」

暁香先輩が頭を下げた。

「一年生がどこまでの実力を持っているのか、今現在の実秘めている力を見るためにあえてこんな無茶をやつた
えつ…ということは…今までのはワザとか…？」

「ごめんね、特にドラゴンを圧倒した歩君の実力が直に見たかったの」

すまなそつに言つてくる久城先輩。

「本気じや無かつたとはいえ、昂輝と相討ちまでよく持つて行つたな」

にひひ、と笑いながら賞賛してくれる澤木先輩。

「潤、お前は俺が介入しなかつたら本当にヤバかつただろ？」「
溜息をつきながら話す獅子堂先輩。

「それくらいにしろ、お前ら。…さて、一年生

たしなめながら暁香先輩が話しだした。

「お前達の基礎能力が高いのは分かった。だが、神沢以外はまだまだ。システムを使いこなせていない。これは一年生は当然の事だ、責める気は全くない。だが、Dクラスは少人数だ。これで戦争をするには、個人個人が即戦力でなければならない。そこで、だ。これからBクラスとの戦争までの一週間、俺達Dクラスは授業を全て免除し、戦闘特訓に当てる事にした」

一週間授業免除！？夢の様な事だが、やつたらやつたで問題が無いか！？…これからどうなるんだろうか…これからに一抹の不安を覚えながら、今日もまた終わつていった…

特訓という名の拷問だよーーー

昨日、Dクラスは授業を一週間免除して戦闘訓練を行う事になつた。武争学園のバトルライザーは特殊で、まず身体能力が跳ね上がり、服装が戦闘用に変わり、それぞれの人と合つた武器と特殊能力が加わる。例えば、俺の刀に雷、暁香先輩は武器は何か知らないが、能力は炎、榎宮先輩の武器は両手剣、能力は剣から放たれるビームみたいなやつ、みたいにだな。ちなみに、武器が無くて素手つてのもあるらしい。… そういえば、獅子堂先輩は模擬戦の時に一瞬だけ能力を使つたが、早すぎて何も見えなかつたな… 能力の詳細と武器を今度本人に詳しく聞いてみよう。更に、勉強によつて能力や力が変わるものになつていて、点数が高ければ高いほどその恩恵も高く、勉強すればその分強くなれる。ちなみに、文系教科は単純に身体能力、理数系教科は必殺技が増える、その他の体育とかの教科は能力の性能が高くなる。ちなみに、一年生は最初の内はシステムの使い方が分からぬるので、伊集院とかの様に突撃の様な単純な戦闘しかできない。だからこそ、最初の内の戦闘訓練は面倒だがやる必要があるだろう。それは一向に構わないんだが… だが… 何故、訓練場所が… 山なんだあ！…………？…………？…………？…………？ 大くなる自然の中で精神を鍛え、自らを磨くのが目的とか言つてたな… いつの間にスポン物語になつたんだよ…?

「そこ 隠たら」よ?

そういう考えている内に久城先輩が薙刀で斬りかかるつて来た。ギリギリでそれを刀で流した。…しまつた、考え方夢中で自分も特訓中だつて事忘れてた。薙刀を流された動きを利用して身を低くして回し蹴り、狙いは…足払いだ。

女行動記!!

思いつきりばやきながら跳躍し、足払いを回避する。更に舞う様に薙刀での連續斬り。俺は紙一重で…

「ぐはあ！！」

避けられるかあ！！…思いつきり直撃しました。はい、痛い事この上ないです。一瞬でズタズタさー。

「…歩君…大丈夫？」

心配そうに声をかけてくれる久城先輩。…特訓中もこれだけ優しいといいんだけどな…特訓中はマジで鬼だもんなー。

「…大丈夫見えます？」

地面に伏せながら呻く俺…カツコ悪。

「アハハ…ちょっと休憩しようか？」

これまた優しい提案だ。…特訓中もこれくらい優しくしてほしいね、全くさ。

「そうすつね…流石に疲れました」

俺は立ち上がりながらそう言つた。慣れてるつていつても、疲れるもんは疲れるしな。

「やつぱり、歩君他の子達とは違うね。普通、最初の内の一 年生はみんな四時間もシステムを起動させてられないもん」

…それは俺が学園の理事長と学園長の息子だからです…なんて口が裂けても言えねえ…。

「そういえば…他の子達は使えなかつたけど、歩君だけどうしきなり能力が使えたの？」

「…確信ついてくるねえ、久城先輩…

「えーっと…まあ、あれですよ」

言葉が出てこねえ…！

「あれ？」

俺の顔を下から覗きこむような感じで見てくる久城先輩…やめて、その純粹な瞳で俺を見ないでえ…！

「…と、つとにかく、伊集院達の様子を見に行きましょ

苦し紛れの言葉がこれかよ…！俺つて、アドリブの才能皆無かもな…。

「そうねえ…昂ちゃんがやりすぎてなければいいんだけど…」

そう、能力を扱う技能群を抜いて高いが、肉弾戦や武器を使つた格闘戦の技能が皆無な俺は、久城先輩に猛特訓されられている。それと同じように、伊集院達も暁香先輩、獅子堂先輩、澤木先輩の三人による猛特訓という名の拷問を受けているのだった。榎宮先輩と椎堂先輩、御久間先輩は暁香先輩から別の指示を受けたらしく、今は別行動だ。

「それじゃあ、休憩も兼ねてルナちゃん達の様子を見に行こうか? どうやら話しきそらすことには成功したようだ。…ちなみに、ルナちゃんとはルミナの事だ。ルミナのルとナをとつてルナという二ツクネームになつたらしい。

「はい、そうと決まつたら早速行きましょう
…よし…このまま今日の特訓を有耶無耶にしていこ…
「あくまで息抜きだから、特訓はこれで終わりじゃないからね?」
あなたはエスパーか!…これ以上やつたら倒れるような氣しかしないぜちくしょー。

特訓とこの本の専門だよーー。(後書き)

誤字脱字があれば報告してください。直ぐに編集しなおします。

サバイバルはお好きですか？（前書き）

投稿遅れています。資格試験や部活、色々あって中々更新できませんが、これからも頑張って投稿して行きますので、よろしくお願いします。

サバイバルはお好きですか？

「能力を使う時に一番大事なのはイメージだ。自分の身体を通して力が出てる感覚をイメージしろ。岩瀬、自分の事に集中しろ。ルミナ、力み過ぎだ。肩の力を抜いて深呼吸しろ。伊集院、無駄だ、絶対に逃がさんぞ。」

俺と久城先輩が様子を見に来た時、暁香先輩達指導の下、三人は特訓の真っ最中だった。

「昂ちゃん、みんなに無理させてないよね？」

心配そうに久城先輩が暁香先輩に話しかけている。…久城先輩、俺にはたつぱり無理させてますよね？

「昂輝、準備ができぞ。」

いきなり俺の後ろから御久間先輩の声がした。見れば手に何か怪しい機械を持っている。…嫌な予感しかしないんだが…

「おっし、なら早速始めつか。」

そういうと暁香先輩は怪しい機械を受け取り、スイッチを入れた。途端に眩い光^{まばゆ}が巻き起こった。そして…目を開けた時は…

「…何だこりやあ！……………?????」

「????」

当たり一面見渡す限りの大木。さつきまではこんな場所にはいなかつた。さつきまでは確かに河原にいた。…どうなつてんだこれ…。ええい、まずは状況整理からだ。服装はジストーム起動時のだし、刀もあるし能力も使えるっぽい…つまり、ここは仮想空間な訳だ。そういう思案している時だった。

「あー、あー…テス、テス、ただ今マイクのテスト中。ただ今マイクのテスト中…」

どこからともなくアナウンスが聞こえてきた。この野太い声は…卯佐美先生だ。

「あー、これからお前らにはバトルライザーを使ったサバイバルゲーム的なものをやってもらう」

・・・サバイバルゲーム！？しかも的なものって何だ！？

「まずはお前等のバトルライザーを見てみろ」

バトルライザーを？俺は言われた通りに見てみる。すると、リミット解除の文字が水晶に浮かび上がっている・・・って、リミット解除だと！？

「見ての通り、システムのリミットを強制的に外してある。これで誰でも能力が使い放題ツて訳だ、良かつたな」

よくねえよ！――！笑いながらサラッと恐ろしい事言つてんじゃねえ――！

「さて、次は右腕を見てみろ」

もうリミット云々には触れないのか、ノータッチでいいのか！？・・・ノータッチなんだろうな・・・俺は諦めて右腕を見た。見た事もない赤い腕輪が着いてる。

「派手な色の腕輪があるだろう？それはお前等のチームを表している。色が同じなら見方、違うなら敵だ。戦力は均等に俺が分けた、ハンデとかは無いから安心しろ」

成程、つまり俺は赤チームな訳だ。

「後はルールの説明だ。といつても、ルールは至ってシンプルだ。

先に他のチームを全滅させたら勝ちだ。どうだ、シンプルだろう？」成程、今回は理にかなっているのかもしないな。前の模擬戦は一年VS上級生、あれにはフェアなんてモノは無かった。だが、今は一年生の能力の使い方の勉強とレベルアップ・・・実戦が一番手つ取り早いだろ？・・・これ以上の練習は無いな。

「さて、お前等準備はいいな？・・・よくなくつてももう始めるがな」

・・・じゃあ聞く必要ないんじゃないかな？

「いぐぞ、・・・始める――――――――！」

先生の野太い声のアナウンスは戦闘の始まりを告げた。その瞬間だ

つた。

「隙だらけだぞ、神沢！！」

「御久間先輩！？」

後ろからいきなり御久間先輩が奇襲を仕掛けてきた。どういう原理だか知らないが、両手の甲から碧い水晶の剣が生えている。

「んなるお・・・・！」

俺は右に跳んで紙一重で避けた。それと同時に、御久間先輩の腕輪を確認した。・・・赤だ・・・つまり・・・

「御久間先輩、待つた！！俺は見方だ！！」

こうするのが自然だろう。俺は武器を置いて腕輪を見せた。

「お前のも赤・・・すまん、てつきり敵だと思つてた。」

どうやら誤解は解けたらしい。俺はホッと一息ついた。誰だつて見方も分からぬのにいきなり戦闘はしたく無いだろう。見方が見つかつたし、とにかく現状を整理しよう。

「先輩、今の戦況つてどうなつてるか分かりますか？」

「すまんが俺にも分からぬんだ。誰が敵で見方なのか見当も付かない。正直、片っぱしから会つた奴と戦闘して行くしかないだろうな。」

「・・・やつぱりそうなるんですね・・・」

俺は深くため息を吐いた。どうやらとことんまでやり合うしか道は無いらしい。・・・しんどい事になりそうだ。なら次は戦力の確認だ。御久間先輩はどんな能力なのか知りたいしな。

「先輩はどれくらい戦えますか？」

「・・・あんま戦闘は得意じゃないんだよ、俺」

苦笑しながら先輩は応えてくれた。・・・何かイメージ通りっぽいな。

「ちなみに、俺の能力はこんなんだ」

そう言つと・・・腕を前に出した。そして・・・

「思案具現化・・・ハンドソード！！」

そう言つと両手の甲に再び水晶の剣が現れた。その様子はまるで何

かのデータが現実世界に引き出されている様だつた。

「俺の能力は自分でイメージした物を具現化することが出来るんだ。だが、具現化出来る物にはルールがある。一つは生物は具現化出来ない。次に、具現化出来る物の数は限られている。最後に、意思があるものは具現化出来ない。・・・とまあ、結構不便な能力だ。」

いや、十分凄いと思うんだが、俺は。

「お前や昂輝の様な完全な戦闘特化の能力じやないからな、戦闘では使い方が難しいんだ。」

そう苦笑しながら御久間先輩が言い終わつた時だつた・・・

「ほおーう、なあーるほど、これならば、俺にも勝ち目がありそうだなあ！！」

どこからともなく聞き覚えのある嫌一な声が聞こえてきた・・・

サバイバルはお好きですか？（後書き）

誤字、脱字がありましたら報告してください。直ぐに修正します。

鋼鉄のペテン師&氷の女王

高笑いを続けるこの声、そう、この声の主は・・・

「伊集院！！」

「ご名答！！」

「とうつーーー」という声と共に伊集院が俺と御久間先輩の前に姿を現した。こいつ、木の上に居やがつたな。

「伊集院、お前は筋は悪くない。だが、いい気になるなよ・・・二人同時に相手にして、本気で勝てる氣でいるのか？」

御久間先輩が伊集院の真意を確かめようとする。俺が伊集院だつたらしたらこれは迷わず逃げる。だが、伊集院は自ら向かつてきたり。しかも勝機有とも言つていた・・・何が狙いだ？

「俺はなーーーーーーんにも隠してなどいながなあ」

この野郎、お前は桜だらけの某エロゲに出てくる悪友か！？

「・・・思想具現化・・・ハンドソード！？」

俺の横で御久間先輩が動いた。両手の甲に碧い水晶の剣が形成されていく。

「ほおう・・・やる気満々ではないか、御久間 聖子！！」

そう言うと、伊集院も忍刀を・・・構えない！？どうこうことだ？伊集院は軽く身構えただけ・・・何を企んでやがる。

「嘗めているのか、伊集院・・・確かに俺は戦闘はあまり得意ではないが、丸腰の相手に後れをとるとでも思つてはいるのか！？」

言い放つと同時に御久間先輩が一気に突撃した。伊集院の胴体を御久間先輩が貫いた、そう思つた・・・だが・・・逆に御久間先輩の水晶の剣が・・・砕けた。そのまま御久間先輩が殴り飛ばされた。飛ばされる最中、^{さなか}御久間先輩は何かを呟いた。

「思案具現化・・・弾丸針！」
^{ブレッドーナードル}

魔法陣が現れ、伊集院に無数の針が襲いかかる。全て胴体に命中した、だが・・・全て伊集院に刺さることなく下に落ちた。だが・・・

「そこだあ！！」

これに乗じて距離を詰めた俺も刀で斬りかかる。だが・・・右手で止められた。

「まだまだ！！」

そのまま空中で体を捻り、踵落とし、ガードされた。そして俺は・

・
「いってえ！！！！！！！」

足に襲つた激痛の為に着地できず、そのまま地面に倒れ、転げまわつていた。どういう事だ！？伊集院の体が滅茶苦茶硬い。

「能力とは便利なものだなあ、同志神沢よ。その程度、この俺の『炭素硬化能力』の前では痛くも痒くもないぞ。」

「炭素だと！？」

御久間先輩が驚愕の声をに上げた。炭素つて言えばつまり・・・

「つまりあいつの体はダイヤモンド並に硬いってのかよ！？」

そりゃあ刃が通らない訳だ。鉄よりも硬いんだから。たく、あいつはどこぞか鍊金術師の強欲の塊か何かかよ？何にしたって、圧倒的に戦いづらくなつたのは確かだ。何せ今の伊集院は鉄壁の防御と、元から持つ圧倒的なスピードがある。迂闊に近づけばこいつちがやられる。ならば・・・

「これならどうだ！！」

俺は雷を纏つた斬撃を放つ。伊集院は避けようとはしない。

「ふん、その程度の斬撃、俺には通用せんぞー！」

伊集院はその斬撃を硬化した腕で弾いた・・・かかった！！

「のうー！」

伊集院の体に強力な電流が流れた。読み通りだ。

「刃は通らなくとも電気までは防げねえだろ」

「ぬう・・・盲点だつたぞ」

流石に電撃は効いたらしい。伊集院はその場に膝を付いている。お

し、このまま一気に・・・

「何てなあー！頃間だ、頼むー！」

伊集院が不敵に立ち上がりながら合図らしきものを言つた。まさか、見方がいるのか!? そう思つて後ろを見た。俺の後ろに迫つていたのは・・・吹雪!?

「危ない、神沢!! 思想具現化・・・ 防御壁!!」
プロテクトウォール

咄嗟に御久間先輩が俺の前に入つて庇つてくれた。・・・あの防御壁が無かつたら確実にやられてたな、俺。

「不意打ちとは・・・お前もやることがえげつないな、久城」

「歩君はこうでもしないと倒すの難しいのよ、聖子くん」

周りに冷気を纏いながら久城先輩がニッコリと笑つている。・・・

意外と腹黒いのな。

「という訳で・・・ まずは一人ね」

そう言うと、さつきよりも巨大な吹雪が久城先輩の周りで形成されだした。・・・ヤバい!!

「させるか・・・つて、おわあつ!?!」

雷を放とうとしたら伊集院が突撃してきた。・・・こいつ、的確に邪魔しやがった!!

「『聖十字反転絶対零度!!』
クロスカルセイド・リバースセルシウス

凄まじい吹雪が俺と御久間先輩に襲いかかつて來た。・・・やべえ、ガード出来る訳が無い!! せめて最大技で相殺して抵抗を・・・

「『聖十字反転雷光波!!』
クロスカルセイド・リバースライトニング

最大級の雷で相殺を試みるが・・駄目だ、吹雪に飲まれる!! 真っ白な吹雪が目の前に迫つた時だった。

「『聖十字反転地獄炎!!』
クロスカルセイド・リバーストロイア

巨大な爆炎が・・・吹雪を・・・消し飛ばした。・・・俺は・・・この炎を知つてゐる・・・そう、この炎の持ち主は・・・暁香先輩。腕輪の色は・・・赤だ。つまり・・・見方だ。

「歩、聖子、二人とも無事だな?」

ただ何気なく言つただけの言葉だろう、だが、俺はその言葉がとても心強く思えた。

「何とかな」

御久間先輩が苦笑いしながら応える。俺達の無事を確認すると、暁香先輩は青チームの方に向き直った。そして・・・
「さて、好き勝手やつてくれた礼だ。それ相応の借りを返させてもらおうか」

反撃宣言を言い放つたのであった。

鋼鉄のペトン壁&氷の女王（後書き）

誤字脱字、おかしな点があれば教えてください。すぐに修正します。

勝利の為に！！

「反撃開始だ、行くぞ！！」

暁香先輩は拳に炎を纏つて伊集院に突撃した。伊集院も腕を硬化させて対抗する。互いの拳がぶつかり合つ。拳の威力は硬化の強度によつて伊集院が勝つている。伊集院はそれが分かつているらしく余裕の顔だ。しかし、暁香先輩はさらに余裕の笑みを浮かべている。

「伊集院、炭素はよく燃えるよなあ！！」

暁香先輩は拳の炎を一気に大きくした。伊集院は直ぐに拳を引いたが間に合わず、自分の体に着火し、体が日に包まれた。・・・成程、炭素効果でダイヤモンドと一緒に強度になつたとしても、ダイヤモンドも元は炭素だ。火を着ければ当然燃えるって訳か。

「ぬう・・・盲点だつたぞ・・・」

伊集院は硬化を解いて、何とか自分に燃え移つた炎を消した。そのまま腰の鞘から忍刀を抜き、構えた。硬化して戦うには分が悪いと判断したのだろう。両者、睨み合いが続く。一触即発の空氣、それを破つたのは・・・久城先輩だった。アイスフロア両手を地面に当てる。

「伊集院君、危ないから退いてなさい！！氷床！！」

技名を言うのと同時に久城先輩の周りが氷始め、凄まじい速さでその範囲は拡大していく。どうやら辺り一面氷らせる気だ。伊集院は飛び上がり、とばっちりを受けないようにしている。冷気が触れたものを全て氷らせるつて、完璧に敵も味方もあつたもんじゃないのな。・・・かといって、俺だつて黙つてやられる気はない。刀を地面に突き刺し、それを足場にして飛び上がる。更に空中で雷を右の拳に集め、それを三叉の槍の形に束ね、刀に向かつて投げる。

「雷神槍！！

雷の槍が刀に落ち、その衝撃で冷氣と氷を吹き飛ばし、俺はその吹き飛ばした場所に着地した。どうやら御久間先輩は俺と同じく跳び上がつて回避していた様で、俺の近くに着地した。暁香先輩は・・・

氷のオプジヨになつてゐる！？嘘！？まさかの暁香先輩が逃げられなかつたのか！？・・・と思つたのは間違いだつたらしい。暁香先輩のオプジヨが炎に包まれ、炎の中から先輩が出てきた。どうやら効かないから避けなかつたらしい、再び伊集院と睨み合ひ。流石は爆炎の使い手だ。

「昂ちゃんに通用しない事は分かつてたけど、歩君が咄嗟にあんな風に回避する何て思つて無かつたよ」

「ソコリと笑いながらそんな事を言う久城先輩。・・・鬼だ。

「神沢あ！！」

「はい！？」

先輩がいきなり俺を呼んだ。表情から察するに、あんまりいい状況じゃあなさそうだ。

「この戦闘、俺と聖子に任せてくれねえか？」

「ふえっ！？」

いきなりの暁香先輩の言葉に、俺は素つ頓狂な声を出してしまつた。つか、何でだ？俺はてつまつこの戦闘をじつやつて勝つかの指示だと思つたんだが・・・

「優姫のさつきの攻撃でハツキリした。あいつ等の狙いは俺達の足止めだ。」

「足止め？何のためにそんな事を？第一、メリットは？」

訳が分からぬ。俺と暁香先輩、更には御久間先輩をたつた二人で足止めにする・・・一步間違えれば自分たちがやられるのに・・・何故だ？

「最初に先生がアナウンスで言つた事を思い出してみる。どんな風にチームを分けたつて言つてた？」

・・・どんな風について・・・俺は考えてみる。《平等になる様に分けた》・・・つて・・・平等に・・・？・・・まさか・・・そういう事か！？

「まだこっちにも相手にも仲間がいるんだ！・・・けど、それが俺達の足止めと何の関係があるんですか？」

やつぱ何のメリットも無い様な気がするんだが・・・

「一年で一番強いお前、クラスの現参謀役である聖子、そして俺・
・一部でとびきり秀^{ひい}でた奴らとある程度の奴らで構成されたのが赤
チームだとしたら・・・青チームはどうなる?」

えーと、それはつまり・・・

「・・・青チームは主力メンバーの集まりって事ですか?」

「正解だ。ならお前が青チームだったとしたら勝つ為にどんな策を
立てる?」

「相手チームの主戦力を孤立させ、消耗したところを一気に叩きま
す・・・って、まさか!?」

俺は考えついてハツとなつた。そう、これは相手チームの勝利への
下準備だ。主戦力を孤立させるにはまず周りを消すのが手っ取り早
い。それを確実にやり遂げる為には・・・他のメンバーに主戦力と
合流する前に奇襲を仕掛けるのが一番だらう。そして、主戦力は助
けに行けない様に最低限の足止めをする・・・今俺達が陥つている
状況こそが正にその足止めだ。先輩はそれに気付いて俺を助けに向
かわせる気なのだろう。なら、さっさとここを離れよう・・・

「・・・つてえ、おわあ!?」

久城先輩が薙刀で斬りかかるつて來た。ギリギリで刀で防ぐが、ヤバ
い、力負けしてる!/?くそつ、何で三年生はこうも動きが早いんだ
よ!?

「・・・何処に行くの、歩君?」

口調は優しいが、目が笑つて無いつて! !力負けしている為、徐々
に押されて体制がキツくなつていく。ヤバいやばいやばい! !やら
れる! !その瞬間^{によいほつ}、久城先輩が吹つ飛んだ。そのかわりに俺の目の
前には、如意棒^{によいぼう}の様な紅く、金で装飾されている棒を手にしている
暁香先輩がいた。どうやらその棒で久城先輩を吹き飛ばしたらしい。
ゆっくりと久城先輩が立ちあげる。

「いたた・・・昂ちゃん、容赦無いなんて酷いよ」

「神沢、分かつたなら早く行け。俺も優姫が相手じゃ他に構つ暇は

無いんだ」

苦笑いしながら久城先輩と対峙する暁香先輩。確かに、余裕は無さそうだ。早く行くべきだな。俺は身を翻すが、そう簡単に行かせてくれない奴がいた・・・伊集院だ。

「行かせんぞ、同志神沢あ！！」

腕を硬化して襲いかかってくる。しかし、こっちにだつてもう一人見方がいる。

「邪魔はさせんぞ、伊集院」

俺と伊集院の間に御久間先輩が割つて入る。だが、伊集院は攻撃を躊躇する様子は無い。それどころか飛び上がり、一撃に更なる威力を与える気だ。それもそのはず、御久間先輩の能力が伊集院には効かない事が最初の攻防で分かつているからだ。しかし、そう何回も同じ事が御久間先輩に通用するはずが無い。御久間先輩は伊集院のその動きに合わせて右の拳を引く。真っ向から伊集院と勝負する気だ。

「ほおう、効かないと分かつていながら再び挑むとは・・・いい度胸ではないか！！」

調子乗つてゐるな、伊集院の奴・・・痛い目に遭つても知らねえぞ。

「確かに、さつきの武器は効かなかつたな。だがな、こいつを硬さだけで防げるか？」

そう言うと、右の拳が碧い水晶に包まれ始めた。さつきまでの武器とは具現化の仕方が違う・・・つまり刃物じやない。あの丸い形は・
・ 鈍器？

「思案具現化・・・ジェットフレイル推進鉄球！！」

右の拳が西瓜大の碧い水晶の球体として具現化完了すると、右腕を伊集院に向けて突きだすと同時球体がもの凄い勢いで射出された。・

・ あの球体、推進エンジン積んでやがる・・・つか、そうじやないとあの球体の加速の仕方は説明できないだろう。空中にいる伊集院に一気に届き、そんまま思いつきり吹つ飛ばした。そのまま伊集院は地面上に落ちた。見た感じかなり効いてるな、今の。目標を吹き

飛ばした球体は、連結されていた鎖によつて腕に戻つて来た。球体には傷一つ無い・・・あの球体、ダイヤモンドよりも硬いのか？

「ぬう・・・油断した・・・まさかそうくるとは・・・」

苦しそうに呻うめきながら伊集院は立ち上がつた。腕でガードし、ギリギリ直撃は避けた様だが、ダメージは大きい様だ。ガードした右腕にはヒビが入つてゐる。

「斬るのが駄目、撃つのも駄目、薄い刃物じゃ防がれて碎かれる・・・そうきたら残る選択肢は一つだ・・・密度の高い超重量の武器で叩いて叩いて叩きまくる！！」

御久間先輩が再び球体を放つ。

「おのれ、そう何回も上手くいくと思うでないぞ！！」

伊集院は回避し、反撃の為に態勢を立て直そうとするが、その足取りは重い。どうやら御久間先輩の読みは正解だつた様だ。

「これで五分だ・・・神沢、行け。行つて俺達を勝利に導け！！」

俺は力強く頷いた。これなら心配はいらない。俺は再び駆け出した、相手の策を潰し、赤チームに勝利をもたらす為に、先輩達の助けを無駄にしない為に・・・

「歩君一人であの二人を何とか出来ると本気で思つてゐるの？昂ちゃん」

「なあに、出来なかつたらこいつちが負けるだけだ。・・・俺には見届ける義務がある・・・二年後、あいつがDクラスを率いるだけの男になるか・・・俺達の勝利を賭けて、ひと勝負といこうじゃねえか！！」

これで何度も炎と冷氣が再び衝突を始めた。

勝利の為に…（後書き）

誤字、脱字があれば教えてください。すぐに修正します。

たとえ刃が折れようとせよ（前書き）

すいません、就職活動やら部活やら何やらでバタバタしてました。
少しは落ち着いたので、少しずつですが更新して行こうと思います。
この小説を読んでくださっている方々、本当に不定期で遅い更新で
すいません。

たとえ刃が折れようとも

さて、なんとか戦闘から抜け出せた訳だが・・・何処へ行けばいいんだ？仲間の救援つていつてもなあ・・・何処に味方がいて、何処に敵がいるのか分かつたもんじゃねえ。完全に八方塞がり、何の策も無いのが現状だ。

「・・・俺つて頼りにならねえな、おい」

完全にぼやきだな、うん。何せここまで情報が無いんだ、見つからなくともしようがない・・・よな？・・・と思つた瞬間、後方で大爆発が起こつた。さつきから右の方でも爆発は起こつてゐるが、あれはさつきまで俺もいた戦場、つまりは暁香先輩達のいる場所だ。ということは・・・後方で起こつた爆発は他の戦闘によるものだ。つまり・・・

「西が正解だ！！」

そう言うと俺は一気に西へ駆け抜けた。・・・こっちで正解・・・だよな・・・多分・・・

さつきの爆発の起つた場所に到着した瞬間、数発のミサイルが飛んできた。俺の周囲は全部木だ、回避は難しい・・・当たる前に何とかするしかねえか。銃の様な形にした指から雷を放ち、ミサイルを撃ち落とす。この角度、流れ弾じやねえ・・・そしてミサイル使いそうな能力には覚えがあるぞ・・・

「澤木先輩！！」

叫びながら地面を蹴り、刀を構えながら飛び上がる。・・・やっぱり、空中にいた！！

「正解だぜ、神沢！！」

飛び上がつた俺に気付いた先輩が拳を構えながらこつちに突つ込んできた。腕輪の色は・・・青、敵だ！！俺は刀を振りかざす。拳と刀がぶつかり合う。その瞬間、俺の刀が・・・真つ二つに折れた！

?・・・・・つて、先輩の体も鉄より硬いのか！？一瞬呆気にとられていた瞬間、俺の首が掴まれた。・・・まずい・・・・・！？

「はっ、俺が体を自在にサイボーグ変えられる事を忘れたか！？」

そのまま地面に叩き落とされた。あまりの衝撃に一瞬息が詰まる。・

・・一応主人公なのにこんなんばつかだな、俺・・・。

「ばさっとしてて良いのか？俺は容赦しねえぞ！！」

両腕をガトリング砲に変えた澤木先輩が間髪いれずに発砲し、攻撃してくる。俺は跳ね起きて左に跳ぶ。・・・ガトリングは方向転換がきき辛いはず・・・このまま一気に横から奇襲を・・・

「逃がすかよお！？」

あつという間に方向転換されました。こうなつたら・・・

「これでも喰らえ！！」

先輩に向かつて折れた刀の柄を投げた。狙いは勿論左腕だ。

「小癪な真似を！！」

澤木先輩は左腕の上げてその柄を回避する。その瞬間、左側の砲撃が一瞬・・・止んだ！！

「隙あり！！」

俺は折れた刀の刃を持つて突っ込んだ。これも狙いは勿論左腕。気付いた澤木先輩は俺に右腕のガトリングを向けて対応しようとする。だが、俺は止まらずそのまま雷を放つ・・・振りをして雷の光だけを放つた。

「目くらましたとお！？」

先輩は一瞬怯んだ・・・ただその一瞬だけで十分だった。光が止んだ時、俺は・・・

「ライザーハソン、システムヲティシシマス」

折れた刀の刃で澤木先輩のバトルライザーを突き刺していた。そう、俺が勝ったんだ。

「・・・なん・・・だと・・・・・？」

驚きの言葉を呴いた先輩、徐々に変身が解けていく。俺は先輩の左手から刃を引き抜いた。勿論、血は出ているが、変身が解けると傷

は無い。痛いつていう感覚はあるだろうけど、戦つて無傷なのだからそこは田をつぶるべきだろ。

「あーチクシヨー・・・1人目のリタイアが俺かよ・・・」
先輩が思いつきりっぽやぐ。・・・3年生なのに一番最初つてプライドが傷つくんだろうな・・・多分。

「しゃーない、負けは負けだ。・・・行けや、神沢」

先輩は何かをふつ切つた様に納得すると、自分の後ろを指差した。
「この先でお前さんの仲間と僚矢と朱里が戦つてる。僚矢は昂輝と
タイムンはれる位だ、マジで強え^{つえ}、気をつけな」

そう言つと、澤木先輩の姿が消えた。消えたといつてもこのバーチャル空間からだが。さて、今の先輩の言葉でこっちのチームもメンバーが分かつた。獅子堂先輩と榎宮先輩ならば、こっちにいるメンバーは、ルミナ、岩瀬、椎堂先輩だ。椎堂先輩がどれだけの戦闘力を持っているのか分からぬが、さっきの澤木先輩の言葉じゃかなり強いみたいだ。ルミナと岩瀬じゃ・・・勝てるわきやねえよな・・・
・早く行こう。そうして俺はこの身で味わう事になったのだ・・・
獅子堂先輩の、三年生の本氣を・・・

たとえ刃が折れようと（後書き）

誤字、脱字があれば教えてください。すぐに修正します。
(最近小説の評価や感想の数で弟に負けてます。面白いと思われたら、この小説にみなさまの清き一票を・・・!-) (何)

初めての戦（前書き）

最近忙しくて中々投稿できません…けど、頑張って投稿して行こうと思っています

初めての苦戦

「・・・嘘だろ・・・つー?」

俺は今日の前に広がる光景に絶句していた。ルミナと岩瀬が・・・地面にうつ伏せに倒れてピクリとも動かない。その二人の間には・・・一人の人影。俺が暁香先輩達に戦闘を任せってきたのが5分前・・・澤木先輩を倒したのがほんの1分前・・・たった6分・・・獅子堂先輩はその短時間でルミナと岩瀬を半殺しのレベルまでやりやがったのか・・・?

「遅かつたな、神沢。あまりにも遅かつたからこいつらのバトルライザー破壊してやろうかと思つたぜ」

そう言いながらこっちへ歩いてくる先輩の体は・・・無傷。・・・貧乏くじ引いた予感しかしねえ・・・。

「お前は俺を楽しませてくれるか?」

そう言つた瞬間、先輩が一気にこっちに突っ込んできた。右ストレートだ、俺は腕をクロスしてブロックする。よし、受けられないレベルじゃない・・・!!そのままこっちも回し蹴りで反撃を・・・入つた!・・・そう思つたが・・・

「セカンドドライブ!..」

先輩がそう呟いた瞬間、一気に先輩が加速した。その為、俺の回し蹴りが空を切つた。・・・先輩は加速系の能力か!・・・なら、こうだ!!

「天候に満聖靈よ、我が声に応え・・・」

「・・・サーードドライブ!..」

まずい!・・・そう思つて振り返つた時には俺は蹴り飛ばされていた。・・・早え!・・・俺は空中で体制を立て直しつつ雷で槍を形成する。着地すると同時にそれを先輩に向かつて投げつけると同時に俺も先輩に向かつてダッシュする。勿論、あのスピードの先輩に槍が当たるなんざ思つちやいねえ。予想通り避けられた、が、回避行動をとつ

た後は誰しも隙ができる。先輩だつて例外じゃ無いはずだ。俺は両拳に雷を溜め、そのまま右のストレート。先輩は俺の接近に気付いたが、動けない。・・・先輩が射程内に・・・入つた！！後は直撃させるだけ、俺はそう思つた。だが、現実は滅茶苦茶厳しかつた。

「フォースドライブ！！」

このタイミングで更に加速するのか！？その瞬間、俺の世界が反転した。・・・まさか！？あの一瞬で俺の足を払つたのか！？俺は成すすべなく地面に倒れる、その瞬間、腹部に強烈な衝撃が走つた。先輩の踵落としが原因だ。やべえ・・・何もできねえ・・・つ。

「おいおい・・・もう終わりか？まだ俺に一撃も入つてないぞ？」俺を試す様な目で見降ろす先輩。・・・ちくしょう、どうすりや攻撃が当たる？どうすればあの速度に喰らいつける！？・・・クソッ・・・何も浮かばねえ・・・。

「・・・俺の見込み違いか・・・もういい、退け」

先輩が吐き捨てる様に言い、俺の左手のバトルライザーを踏みつぶそうとした瞬間、俺の周りの土がいきなり変形し、先端が拳の形になり、先輩に襲いかかつた。流石に不意を突かれたのとあまりにも近かつたので先輩も回避できず、そのまま土の腕に殴り飛ばされた。

「ホント容赦無いですね、獅子堂先輩？」

この声は・・・椎堂先輩だ、そう思つて目を開けると、白衣と銀縁の眼鏡をかけた、研究者っぽい服装に身を包んだ椎堂先輩がいた。助けに来てくれたのか？

「・・・お前の相手をしていた朱里はどうした？」

獅子堂先輩はゆっくりと立ち上がりながら椎堂先輩にそう訪ねた。

「榎宮先輩なら僕と彼女達で倒しました」

そう言うと、森の中からルミナと岩瀬が出てきた。さつき倒れてたはずなのに・・・一体いつの間に！？

「成程、俺の詰めが甘かったか」

獅子堂先輩はそう言うと、再び身構える。流石にこの人数相手は迂闊に攻撃できないと踏んだのだろう。獅子堂先輩が受けの体制・・・

勝機あるかもな・・・よおし！俺は気合いで一気に立ち上がると、「三人とも、俺の援護をしてくれ！！そうすれば・・・勝てる！！」さつきまで倒れていて図々しい願いだと思う。だけど、これでもしも任せっぱなしだつたら・・・完全に駄目人間だ。・・・それだけは嫌だ。

「ん～分かつた、歩君。僕も力を貸すよ」

「仕方ないわね、詩織もいいわね？」

「・・・問題無い」

「頼むぜ・・・反撃開始だ！..！」

初めての戦（後書き）

誤字脱字があれば教えてください。すぐに修正します。

勝利をもぎ取れ！！（前書き）

毎回遅くなつてすみません。今回は夏休みの課題の野郎に邪魔され
てました。。。いやはや、何で課題なんてモノがあるんでしょう
かねえ。。。ま、とにかく、これからも更新していくんで、見捨
てずに読んでやってください。

勝利をもぎ取れ！！

反撃開始・・・その言葉と同時に岩瀬が動いた。お得意のハルバードを片手に獅子堂先輩に斬りかかる。

「甘いな！！」

獅子堂先輩は岩瀬の攻撃を飛び上がって避け、見事に空を斬らした。だが、岩瀬はそのまま空中にいる獅子堂先輩にハルバードの先端を向ける。

「・・・甘いのはあなたの方・・・伸びて、シルフィード・・・！」

岩瀬がシルフィード（ハルバード（つか名前あつたんだ・・・））に命じると、猿の妖怪が持つてる棒みたいに獅子堂先輩に向かって柄が伸びた・・・てか、伸びるんすか？虚を突かれた獅子堂先輩はそのままシルフィードに跳ね飛ばされたが、空中で体を捻り、体制を立て直しつつ着地した・・・ここは倒れろよ。どうやら直撃は避けたらしい・・・憎たらしいつたら。だが、岩瀬だけでこっちの攻撃は終わらないみたいだ。ルミナがハンドガンで・・・前言撤回、今あいつの構えている物は・・・ミサイルランチャー！？を躊躇なく発砲・・・もとい発射した。大爆発、大音響に土砂のフルコースが獅子堂先輩を襲う。・・・普通だつたら死ぬな。よし、今の内に聞いておくとしよう。

「なあ・・・一つ聞いていい？」

「――どうぞ」

俺の問いかけにみんな気付いた・・・三人同時に反応せんでも・・・。

「みんなってどんな能力なんだ？」

「私の能力は見ての通り、重火器系の『武装換装』よ」

ふむふむ、ルミナは武装換装、つと。

「・・・手に触れた物を自由自在に伸縮させる事ができる・・・」

岩瀬はいわゆる『無限伸縮』か。

「僕のはいわゆる『鍊金術』ってやつだよ。触れた物を変形させたり、造り替えたり、材料とかが揃つてれば色々出来るよ。ただし、そこに材料のある物しか造りだせないし、材料以上の物は造れないから、万能つて訳じやないのが唯一の欠点だね」

先輩は鍊金術か・・・手を合わせてから使用したら色々アウトだな。
・・・そうだ。

「先輩、今の状況下で鉄生の物つて造れますか？」

「土には鉄分があるから、多分問題無いよ」

よし、これで俺も本気で戦えるぞ。

「刀造つてくれません?」

「分かった、少し待つて」

そう言つと、先輩は地面に円を描き、何かよく分からぬ模様を円の中に描いていく。

「ちょっと、もう獅子堂先輩を足止めしどけないわよーー！」

ルミナの怒号が響く。見ると、ルミナのミサイルの残弾が切れかけているらしい。岩瀬も身構えている・・・どうやらマジで時間が無いらしい。

「先輩、早くーー！」

俺が先輩を急かす。だが、先輩は冷静に模様を描き切ると、そのまま両手を地面に当てた。さつき描いた魔法陣らしきものが発光し、その光があつという間に刀を生成した・・・この人も何でもありだな。

「完成です」

「！！ミサイルが尽きた、来るわよーー！」

再びルミナの怒号。だが、先輩と俺は動じなかつた。先輩が刀を拾い上げて俺に渡してくれた・・・優しいな。

「どうもっす」

そう一言言つと、俺は刀を振り上げ、さつきまでミサイルの雨が降り続いていた場所に向けて雷の斬撃を放つた。再び大爆発、お次は

雷付きなのでさつきより豪華だ。

「僕も攻撃参加、つと」

先輩の足元が発光し、土で造られた数匹の狼の顔が煙の中目がけて襲いかかる。だが、その狼の顔は全て煙の前で一陣の風によつて砕け散つた。その風は更に加速し、ルミナと岩瀬に一気に襲いかかる。
・・・一瞬のすれ違い様に一人のバトルライザーが壊された。・・・
さつきよりも数段速い！！そう思つた瞬間に俺の目の前にその風がやつて來た。咄嗟に刀で防御する・・・なんとか防いだが、全く動きが見えねえ！！けど、やるつきやねえ、そう思つて刀を振るが、風・・・ええい、もう面倒だ。獅子堂先輩は既にその場にいない。
椎堂先輩の目の前に一瞬で移動してやがつた。まずい、そう思つたが、椎堂先輩は落ち着き払つて対応した。獅子堂先輩が襲いかつた瞬間・・・地面を水の様に変化させ、その中に潜つて回避した・・・
・先輩は何でもありかよっ！！そして、地面から飛び出すと同時に、椎堂先輩は獅子堂先輩の背面を一気にとつた。椎堂先輩のそのままバトルライザーを狙つた渾身の右ストレートが放たれたが、獅子堂先輩はそれよりも早く椎堂先輩のバトルライザーを蹴り壊した・・・だから何でもありますか！？そしてそのまま俺に襲いかかる・・・はずだつただろう。けど、襲いかかれなかつた。何故なら、俺がさつきの場所にいなかつたから・・・そう、俺は次の行動を起こしてたんだよ・・・さつき椎堂先輩が変化させた地面の中に潜つたのさ。そして、先輩がやられたと同時に、俺は地面の中から獅子堂先輩の左手目がけて斬りかかつた・・・。

勝利をむぎ取れ！！（後書き）

誤字、脱字があれば報告してください、すぐ修正します。感想や評価をいただけないと、弟を見返して作者のテンションが上がつて更新が早くなる可能性がございます（調子に乗るなま、とにかく、弟の作品ともども読んでやってください（弟の作品とか作者名が分からぬや 魅味無いだろ

絶対零度の死刑宣告（前書き）

いやはや・・・やつと夏の課題が終わったと思つたら次は就職試験です・・・だれか僕にまともなお休みをください（汗）。

それはそつと、感想を下さつた方、どうもありがとうございます。それを励みに地道に書いてきた最新話です（それにしても短いですが）。どうか読んでやってください。

絶対零度の死刑宣告

・・・捕えた、勝った、そう思つた瞬間、液体化していた地面が氷つた。俺は右足の先がまだ地面に浸かっていたので、足が掴まつてそこで止められた・・・つて、氷つて事はまさか・・・

「僚矢君、大丈夫?」

どうやつて来たのか知らないけどいるな、俺の後ろの木の枝の上に・・・久城先輩が・・・暁香先輩を倒したのか?・・・マジか・・・

「何とかな」

いつの間にやら獅子堂先輩もそつちに退避していた。だが、獅子堂先輩の両腕、両脚共に血だらけになつてゐる。どうやら先輩の能力は無制限の身体能力強化だが、段階を上げていくにつれて体への負担も大きくなるみたいだな・・・俺だつたら「めんこつむりたい能力だ・・・つて、んな事言つてる場合じやねえ!!なんとか脱出しないとやられちまう、足元の氷りを碎いて脱出・・・

「あ、その氷り碎くと歩君の足も一緒に碎けちゃうよ~」
するわけにはいかなくなつた。・・・いやさ、現実には影響ないけどさ、やっぱ痛いのは嫌じやね?・・・それ以外脱出方法思いつかないけどさ。そうだ、足を引っ張りだそう!・・・ビクともしないな、うん。

「さて、それじゃあトドメといこうか

木から下りてゆつくりと薙刀を振り上げつつ二コ二コと迫つて来る久城先輩・・・いや、やめようぜ、・・・ちくしょう、やつぱり足を碎くしか・・・そう思つて覚悟を決めようとしたら、なんか足が抜けた・・・何で抜けた?俺が自由になつたのを確認するや否や、薙刀を振り下ろして氷りの針を飛ばしてきた、が、俺の周りが一気に炎に包まれ、針は全て溶かされた・・・この炎は・・・!

「無事だらうなあ、神沢あ!..」

丁度久城先輩の逆方向から暁香先輩が炎の中から現れた・・・まだ

やられてなかつたのか！！

「あらら・・・伊集院君がいたとはいえ、氷人形じゃ時間稼ぎ位にしかならなかつたみたいね」

「あつたりめーだ。あの程度でやられてたら生徒総指令長なんてやつてらんねーよ」

「ふつ・・・しぶとい奴だ」

そのまま戦いだす三人・・・あれ、いつの間にやら俺蚊帳の外？

「フム、やはり同学年同士の結束は強い様だ。我らは空氣だな、同志神沢」

やつぱり伊集院もそう思つてたか・・・だよなあ。

「・・・だな、結構居辛い空氣だぜ、こりや・・・つて、伊集院！？」

気配もなく俺の隣に来てやがつた・・・心臓に悪いぜ・・・つて、伊集院？・・・生きてたの？

「ハツーッハツハツハツハッ！油断大敵だぞ、同志神沢！！」

違和感に気付いた瞬間に伊集院の炭素硬化した拳がとんでくる。俺は刀の柄で受け止める・・・また刀が折れそうだなあ・・・。

「てか、やられてなかつたのか！？伊集院！！」

俺は伊集院と妙な構図で力比べしながら問いかける。ちなみに、話しの流れからして想像できないだろうが、この間俺は必死だつたりする。微妙なところで受け止めているため、力が入れずらいからだ。「ハツ、この俺がそう簡単にやられると思つていたのか？」

口元に微笑を浮かべながら拳に更に力を乗せてきた。俺も更に力を込めるが、何にしても体制が悪い。伊集院の事だ、多分これを見越して先手を打つてきたんだろう・・・まつたく、せこい奴だ。

「ああ、思つてた・・・よつ！――」

そう言つと俺は空いていた左手で砂を掴み、伊集院の顔（主に目）に向かつて砂を投げつけた。伊集院は舌打ちしながら飛び退り、回避しようとするが、一步遅く、思いつき砂が目に入つたようだ・・・

・ざまあ見る。

「ぬう・・・卑怯なり、同志神沢！！」

目を押さえながら卑怯だと訴えてくる伊集院、どうとも言えぱいisa。その隙に伊集院のバトルライザーに雷を浴びせて破壊した。伊集院の姿が消えていく・・・これでよしつと。さてと、暁香先輩はどうなつてるかな？久城先輩の氷人形数体、更に早すぎて良く見えないが、獅子堂先輩と戦つてゐる・・・案の定苦戦している様だ。しゃあねえ、参戦するかな・・・

「どこに行くの？」

嫌な予感・・・

「女の子を退屈させる男の子はモテないよ？」

氷りの様に恐ろしい声が俺の後ろから聞こえる・・・消えろ、幻聴！！！！！！俺はまだ死にたくない！！

「先手・・・必勝！――――――――――――――――――――――

覚悟を決めた俺は振り向き様に雷の斬撃を放つた・・・が、片手で弾かれた・・・うえ・・・マジかよ・・・。

「本気で行くけど・・・覚悟はいい？」

・・・こつから地獄を見そだな、こりやあ。

絶対零度の死刑宣告（後書き）

誤字脱字等があれば教えてください。すぐに修正します。
感想などを頂けると、更新が早まるかもしれません（汗）

ついで、なまな戦争だ…（前書き）

就職試験が終わって一段落・・・な訳ないです、はい。結果が来るまで終わりません、合格しないと終わらないんですね！！

つてなわけで、小説の世界に逃避しようにもネタが・・・まあ、とにかく、短いですが更新します。読んでやってください。

よひしい、ならば戦争だ！！

久城先輩と再び戦闘を始めて数分、俺の周囲にはとんでもない数の氷の鳥達飛び交っている・・・バッヂリ追いつめられます。それよりも、何でもありなのかよ、氷人形ってやつは！！そんなこんなを考えていると、氷の鳥が一羽が俺に向かって襲い掛かって来た。それを刀で叩き落とすと、また一羽と次々に襲い掛かってくる。さつきから逃げては氷の鳥を叩き落としての繰り返しだ、正直言つて切りが無い。ちくしょう、俺の攻撃にも人形系の技があれば対抗できそうなんだけどな・・・残念ながら俺の能力にはそんな技は皆無だ。というより、俺の能力には実体と形そのものが存在しない。それは暁香先輩の能力にも言える事だ。けど、久城先輩の能力は氷と冷気を操る・・・氷には実体があるからこういったことが可能になつてゐる・・・卑怯だろ？・・・語つてる内に無数の鳥さん達の総攻撃が来た。

「いい加減に鬱陶しいわあ！！」

俺は叫ぶと同時に雷を放電し、自分の周り^{アイスフロア}と氷の鳥を消し飛ばした。いい加減我慢の限界だ、反撃を・・・

「氷床！！」

「とお！？」

雷を放とうとした瞬間に地面が氷りついていく。反射的に上に跳んだが・・・

「残念、隙あり」

空中に先にいた先輩に薙刀の柄で思いつきり殴られて叩き落とされた。ちくしょう、俺の考えが読まれてやがる。けど・・・その長い薙刀が命取りだ！！

「閃光よ、降り注げ・・・招雷^{しょうらい}！！」

俺は地面に叩きつけられる前に技を放ち、空中から巨大な落雷を発生させた。技を出し終えた途端、息が詰まる様な衝撃が体中を走つ

たが、んなことはこの際どうでもいい。なんせ薙刀が避雷針の役割を果たし、久城先輩に雷が直撃したんだ、多少の痛みを気にしてられるかよ。流石に直撃はダメージが大きいらしく、久城先輩はそのまま森の中に落ちていった。おっし、このまま追い打ちを・・・そう思った時だつた・・・いきなり周りの景色が変わつた。さつきまでは森の中にはいたはずなんだが・・・何故か俺の周りは廃墟に変わつていた。・・・あれ？

「歩君、無事？」

そういう考えていると久城先輩が合流してきた。久城先輩の様子や、腕輪が消えていることから、これはDクラス関連の事では無いだろう。だとすると・・・一体誰が・・・？

「いたぞ、昂輝。あそこだ！！」

「ああ、一人とも無事かあ！？」

暁香先輩と獅子堂先輩も合流した。その瞬間だつた、いきなり聞けなれない声で、だが聞き覚えのある声でアナウンスがなつた。

「あー、あー、アホでバカで最低なDクラスの愚か者諸君、俺様は天才Bクラス生徒総指令長の倉野くらの興二きょうじである」

やつぱり・・・あの典型的なヤンキー気取りのBクラス指令長様か・・・つまりこれは・・・

「これより、Bクラス対Dクラスの戦争を始めることにしたあ！！感謝しろDクラスのバカ共お、俺様達が忙しい中直々に出向いてやつたのだ」

いや、来なくていいからさ。・・・多分作者がネタに困つて急遽戦争を速めただけだろうしさ。

「さあ、戦争の開始だあ！！ヒヤーハハハハハハハハ！！！！！」

！」

あのBクラス総指令長、一方的にアナウンスしておいて一方的に切りやがつた。

「あんの野郎・・・戦争は学校でやるのが決まりだろうが・・・しゃあねえ、俺達だけで叩き潰すぞ！！！」

暁香先輩達は何にしてもやる気みたいだし、この身勝手な振る舞いには俺だって腹がたつた。だから・・・

「俺も暴れるとしますか！！」

・・・ぶっちゃけ久城先輩達との戦いからさつをと逃げたいだけだつたりするけどね

そんなヘタれた考えを胸の奥にしまいこんで戦争が始まった。

まいじー、なまけ戦争だ…。（後書き）

誤字脱字があれば教えてください、すぐに修正します。

感想などを頂けると更新が早まりたりするかもしれません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7417k/>

私立武争学園 Dクラス戦闘報告書

2010年10月31日06時03分発行